

立山も白山も特別な存在



北陸大学
国際コミュニケーション学部教授
立山信仰研究者
福江 充

——日本人ははるか昔から、なぜ山を畏れ敬ってきたのでしょうか。

まず日本の国土の大部分が山です。しかし、薄暗い山は怖く、人々は「山の奥には魑魅魍魎がいる」と考えていました。死んだ人の魂の行き場所だとも思った。しかし同時に、山は自然の恵みを与えてくれる存在でもあります。水の源流はあるし、山菜もまきも採れます。だから、山を恐れながらも、そばで暮らし、畏敬の念を抱きました。それが山岳信仰につながるのです。

——立山や白山はどんな点が特別でしたか。

越中や能登は、平安貴族が暮らした奈良や京都といった都から近かったのです。もちろん陸上交通の視点では遠いですが、奈良時代には既に日本海側の航路が発達していました。海上交通を使えば圧倒的に速い。立山・白山のある北陸は海の幸もあれば、コメも採れます。平安貴族にとつては暮らしを豊かにしてくれる土地で、政治の影響が及ぶ範囲でした。

宗教者から見ても北陸は特別な場所です。平安時代には、立山や白山の火口湖の雪解け水で書いた法華経を山中に奉納しています。江戸時代には「富士山を加えた三霊山を巡礼する過酷な参詣旅行「三禪定」も盛んでした。

——貴族ではなく、庶民にまで浸

透したのはなぜ。

立山は地獄谷の存在が大きいです。平安時代の中期には立山地獄は生き地獄として、ある意味では「ブランド化」していました。今昔物語にも立山に関する説話が四つも登場しています。立山が火のイメージなら、白山は水のイメージ。庄川や手取川、九頭竜川の源として、水の神様がいる場所として親しまれました。

——能登の人々にも立山は特別な存在だったそうですね。

漁や航海する人にとって立山や白山は大切なランドマーク。自分の位置や天候状況を確認し、安全を確保するための目印とされていました。さらに昭和初期の証言で、能登から舟で立山に向かったという記録があります。常願寺川を上り、上滝あたりで降りて芦峯寺まで行ったのでしよう。

——北陸応援もよりの印象は？

北陸はアジアの窓口でした。奈良時代には中国の東北地方を中心に栄えた渤海の使節の大切な拠点です。北前船が盛んになる江戸時代の前から、日本海交通のど真ん中にあります。アジアの一員として日本を考えれば、北陸は日本の中心。北陸を復興できなければ、日本が日本でなくなります。

山登りは一歩ずつ。復興は大変なことだけれど、少しずつやっていくしかないと感じます。山々をモチーフにした北陸応援もようは、着実に歩み続ける登山者の姿にも重なります。

ふくえ：みつる 文学博士（金沢大）。30年以上にわたり立山信仰を研究している。立山博物館、高志の国文学館での学芸員を経て、2015年から北陸大（金沢市）で勤務。学生に日本史や宗教学、民俗学、山岳信仰を教えながら研究を続け、当面は海から見た立山信仰の課題に取り組む。